

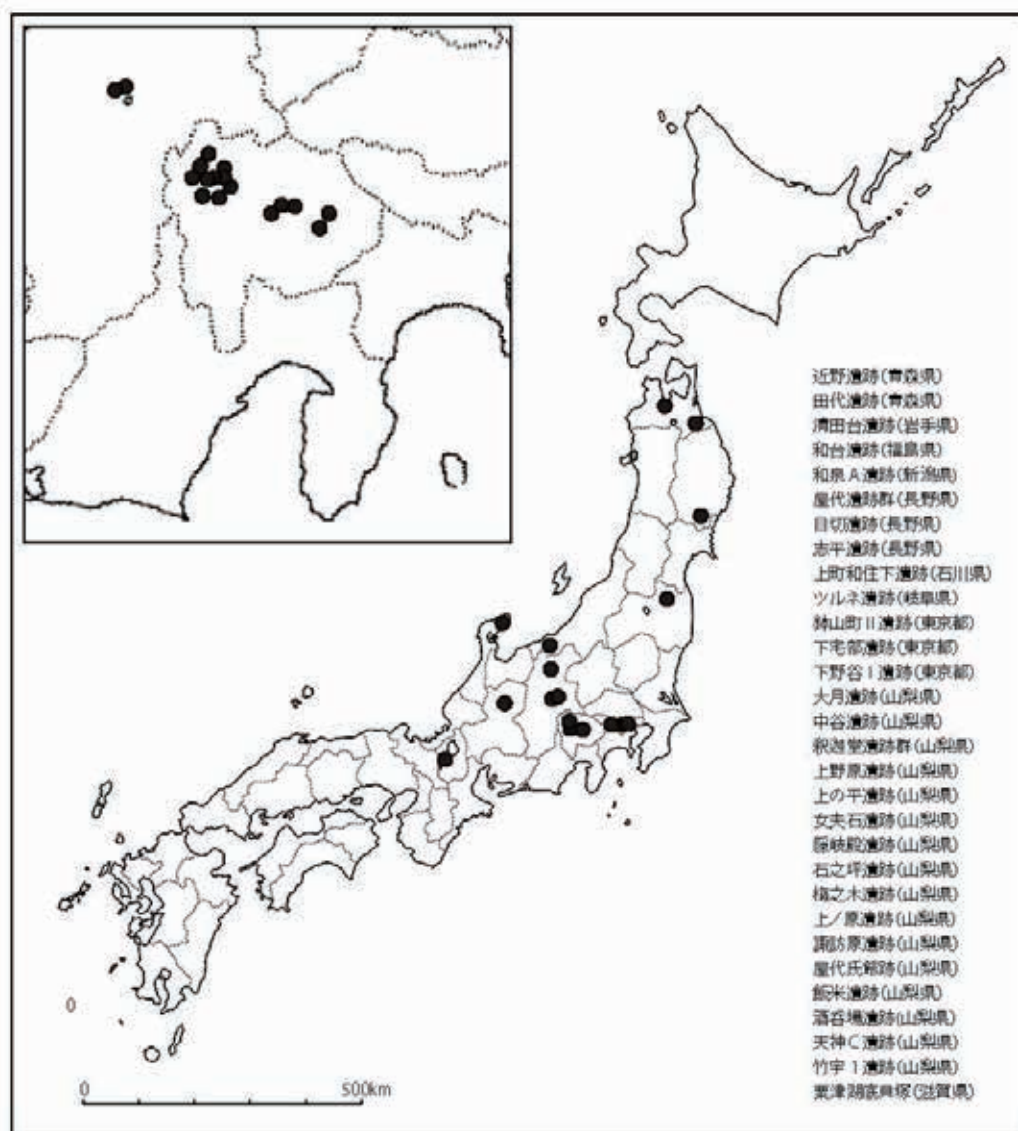
縄文時代中期における内陸中部地方の生業と野生マメ類利用

佐野 隆（北杜市教育委員会）

はじめに

小畑弘己（2011）と中山誠二（2010）らによる縄文時代のマメ類利用の研究は、縄文時代早期から野生マメ類利用が始まったことを示したが、マメ類圧痕の検出例がもっとも多い縄文時代中期における現時点の検出事例は、内陸中部地方に集中する傾向にある（第1図）。これは中山誠二らによる資料調査が精力的に行われた結果、山梨県を中心に資料数が増加したことによると考えられるが、当該地域の縄文時代中期の生業のあり方を反映している可能性もある^{（註1）}。小論では列島各地の縄文時代の生業構造を比較検討し、内陸中部地方の資源環境と生業の特質が野生マメ類利用を促進した可能性を検討する。

生業構造とは、人類が所与の地理環境と生息する動植物の生態に適応して、生存のために行う資源獲得と消費にかかる諸活動と、環境、物質文化等の有機的連結のあり方を意味しよう。考古学的には、自然環境と動植物資源の生態、動植物遺体、人工遺物、集落や住居跡と資源獲得領域などにかかる多様な情報が統合されて、時代や地域ごとに生業の全体的な構造が理解される。ここでは単純化して主たる利用資源の組み合わせを生業構造と呼ぶ。また内陸中部地方は、八ヶ岳山麓を典型とする山梨県、長野県など内陸の河川中流域から上流域の丘陵地帯を指す。



第1図 中期マメ類分布図

列島各地域の生業構造

本州以南では陸生動物と堅果類が縄文時代の食性の基本であったとされている（佐藤 2007）。縄文時代人骨のアイソトープ分析による食性研究では、列島各地の食性の違いが指摘されている（第2図、南川 1994）。この各地方の食性の違い、すなわち生業構造の違いを実例に即して概観したいが、管見に触れた資料の制約から中期以外の時期も引用する。

水沢教子（2012）は、屋代遺跡群（長野県千曲市）の動植物遺体分析から、「千曲川の豊富なサケ・マス資源に加え、大量のオニグルミやササゲ属を含む雑穀類をメジャーフードとして利用できた屋代遺跡群」の食性の特徴を捉え、掘立柱建物跡はサケ・マス類の保存処理施設であった可能性を指摘している。「ササゲ属を含む雑穀類」のメジャーフードとしての評価は保留するとしても、遡河性魚類が獲得可能な東日本の河川中下流域の食性の典型を示している（第3図）。

古東京湾沿岸の貝塚地帯では、植月学（2010）が「東京湾内湾沿岸に暮らした縄文人が生業の主体を漁撈に置く、近代的な意味での漁民であったことはおそらくない」とし、時代により海生魚類への依存度に高低はあるものの「植物資源を食性の主体として海生魚類はあくまで補完的な資源であった」ことを指摘している。相模湾に面した縄文時代前期の例であるが、小田原市羽根尾貝塚の動物遺体分析によれば、貝類、魚類に加え、イノシシを主にニホンザル、タヌキ、鳥類が大きな割合を占めていて（第4図、樋泉ほか 2003）、植月の主張を裏付けている。

樋泉岳二（1991、1993）は、貝類採取と魚類漁獲の季節性、水域環境の分析にもとづき、愛知県伊川津遺跡における縄文時代晩期の水産資源の時空間的利用実態を追究し、魚介類の獲得が夏の陸産資源の欠乏を補填し、周年居住した可能性が高い伊川津貝塚での居住安定性を向上させたと指摘している（第5図）。

内山純蔵（2007）は、鳥浜貝塚、琵琶湖沿岸の粟津第3貝塚と赤野井湾遺跡の動物考古学的分析から、ヒシ、クルミ類やカシ類、トチなどのナッツ類とイノシシ、シカの陸生哺乳類食料が主要な食料資源であるが、低湿地では大量の淡水魚類資源が生業戦略の安定性を担う役割を期待されたと論じている（第6図）。

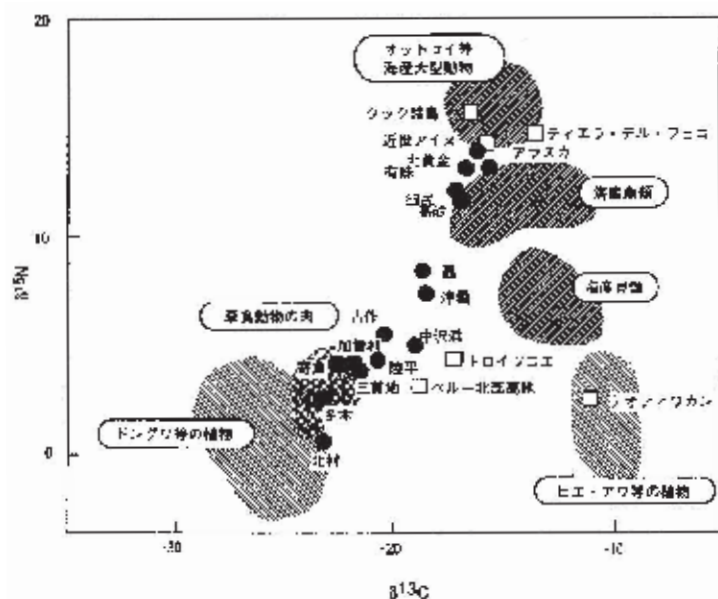
以上、例示数が少ないものの東日本、古東京湾沿岸、西日本の生業構造を概観した。列島各地域の生業の実際は多様な環境を反映して複雑であり、以下のように単純化されるものではないが、主食（堅果類）＋動物（シカ・イノシシ）＋補完食料という共通する基本構造が認められよう（註2）。

東日本	主食（堅果類）＋動物（シカ・イノシシ）＋補完食料（サケ・マス）
古東京湾	主食（堅果類）＋動物（シカ・イノシシ）＋補完食料（海産資源）
西日本	主食（堅果類）＋動物（シカ・イノシシ）＋補完食料（淡水魚類）

主食である堅果類は、年間の獲得熱量の主要部分を占め、民俗事例によると8割近くに達する可能性もある（表1、小山 1988、佐野・大綱 2012）。堅果類は、季節的に多量に採集可能で、豊凶に大きな年変動があるため貯蔵が不可欠である。またクリを中心に管理栽培の可能性も指摘されている（西田 1981）。動物質食料としてのシカ、イノシシは、安定した捕獲は困難であるが、その獲得熱量は大きく縄文時代人の嗜好性も強い。また食料としてだけでなく皮革、骨角器素材としての需要も無視できない。ここで想定した補完食料とは、単なる副食、おかずというだけでなく、主食に欠乏が生じた際に主食の代替として期待できる食料資源を意味し、上記の生業構造においては水産資源が利用されている。一般に補完食料は、集落近隣で安定的かつ容易に獲得が可能で、生産量の年変動が小さく、保存・貯蔵も可能な性質の動植物資源が選択・利用されると考えられる。

内陸中部地方の資源環境

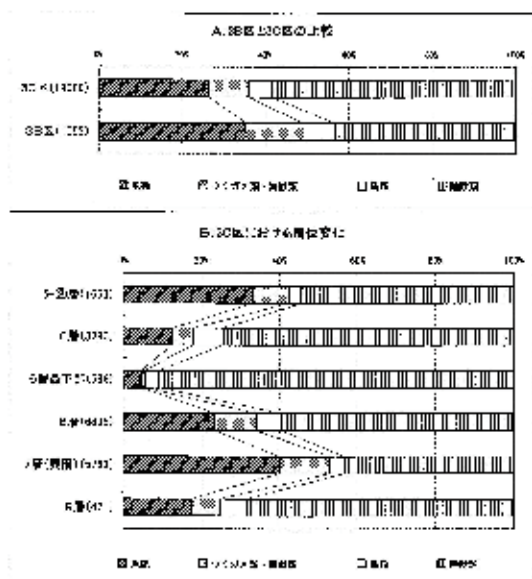
内陸中部地方の生業構造を検討する前に、当該地方の資源環境を考えたい。当該地方の集落遺跡は高燥な台地上に分布することが多く、生業復原的研究を可能とする動植物遺体に乏しい。しかし遺構埋土等から出土する炭化植物遺体や焼獣骨の出土例をみると、ブナ科、クリ、クルミなどの堅果類、イノシシ、シカに代表される動物が重要であったと考えられる（佐野 2008、中沢 2012、中山 2012）。こうした食品目には、温帯落葉広葉樹林帯の資源環境が投影されている。



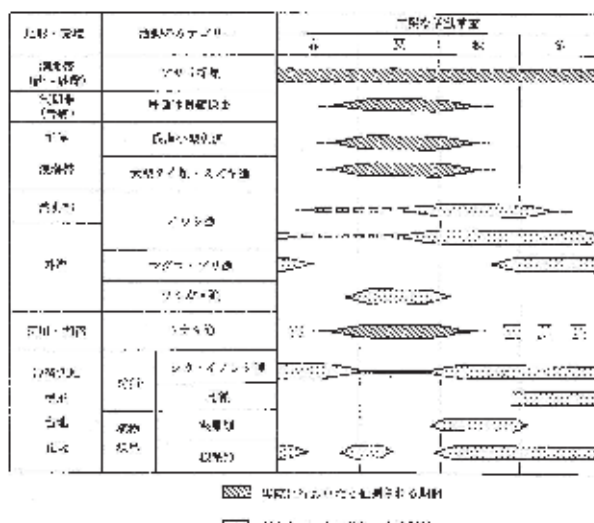
第2図 縄文時代の食性

		春	夏	秋	冬
魚 類	サクラマス				
	シロサケ				
	コイ科				
	ドジョウ科				
	ハゼ科				
動 物	イノシシ				
	シカ				
	ウサギ				
	キツネ				
鳥 類	カモ科				
堅果類	オニグルミ				
	クリ				
	トチノキ				
その他	ササゲ属				
	アカザ属				
	ニフコ属				
	ヒシ				
	キハダ				
	銅球(丸等)				

第3図 屋代遺跡群の生業スケジュール



第4図 羽根尾貝塚の動物遺体組成



第5図 伊川津貝塚の生業スケジュール

表1 赤桶村の獲得食料

産品名	生産高	単位	kg換算	kcal/100g	kcal換算	比率
アズキ	1,200	合	162.4	328	532,672	0.92%
アワ	1,000	合	108.2	364	393,848	0.68%
エゴマ	200	合	19.8	463	91,674	0.16%
オオムギ	1,200	合	118.8	340	403,920	0.70%
カキ	800	合	120.0	60	72,000	0.12%
カワラグミ	150	合	22.5	51	11,475	0.02%
クリ	2,000	合	300.0	156	468,000	0.81%
コムギ	3,000	合	432.0	333	1,438,560	2.48%
コメ	0	合	0.0	338	0	0%
スモモ	100	合	0.0	46	0	0%
ソバ	8,100	合	729.0	343	2,500,470	4.31%
ダイズ	7,100	合	958.5	396	3,795,660	6.54%
トチ	40,000	合	7,200.0	365	26,280,000	45.26%
ナラ	50,000	合	9,000.0	324	17,496,000	30.14%
ハエ(アマゴ)	130	尾	-	143	18,590	0.03%
ヒエ	10,500	合	1,231.2	370	4,555,440	7.85%
マス	4	尾	1.8	142	255.6	0.0004%
合 計					58,058,564.6	100%
栽培系					13,795,719	23.76%
野生系					44,262,845.6	76.24%

一方、当該地方における水産資源利用については、資料に恵まれず実態の把握が難しい。幅広い資源を利用した縄文時代にあつて、当該地方でも淡水魚がさかんに利用されたことは想像に難くないが、一定量の安定した漁獲が見込まれ、上記に示した補完食料の役割を果たし得た資源であったかが問題となる。

秋道智彌(1992)によると、現在の内陸中部地方の水産資源量は、東北日本、古東京湾沿岸、西日本に比べると少ない(第7図)。サケ・マスの遡上の西限は神奈川県酒匂川まで、アユは遡上するものの、その量

は琵琶湖や北陸地方に比べると格段に少ない。大正時代頃の諏訪湖は比較的、淡水魚資源が豊富であったという(沖野 1997)。藤森栄一は、諏訪湖岸の縄文時代中期の殿村貝塚でオオタニシからなる貝層が出土したことを報じ、同時に諏訪湖に近世前後に移入された魚種にも注意を払っている(藤森 1995)。諏訪湖は淡水資源の供給源として重要な役割を担ったと考えられるが、水域は限定的で、その恩恵にあずかった集団の範囲はそう広くなかったであろう。

山梨県における水産資源の状況を確認するために、中近世の文献にみえる甲斐国の淡水魚利用の状況を示した(表2)。これらの文献は村明細帳、物産書上、日記、書状等で土地の名産、物産を記録、紹介する性格のもので、魚種では食味が良く名産とされたアユ、コイ、フナ、ウナギの記述が多い。これらの魚種の漁獲があるのは、甲府盆地内の釜無川、富士川、笛吹川、桂川といった大きな河川の中流域で、八ヶ岳山麓ではわずかに須玉川上流にヤマメの記述があるのに限られる(第8図)。

現在の山梨県内の縄文時代中期遺跡の分布をみると甲府盆地周辺の丘陵地に集中し、漁獲が期待される甲府盆地内の遺跡は少ない。河川堆積層が厚い盆地内では遺跡の発見が困難であることが大きく影響していると思われるが、中近世の漁獲状況をみる限り、遺跡が多い丘陵地で縄文時代に水産資源が補完食料になり得たとは考えにくい。

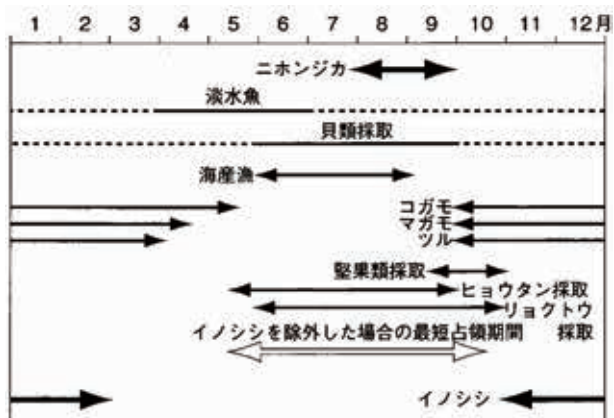
以上の山梨県の状況を敷衍すると、内陸中部地方、特に河川上流域や丘陵地帯では、淡水産資源が食料として利用されたであろうが、諏訪湖の直近を例外として、水産資源が補完食料になり得ない資源環境であった可能性が高いと思われる。

内陸中部地方の集落遺跡の様相

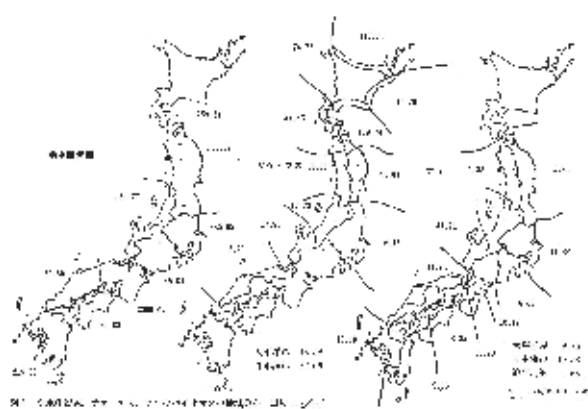
集落遺跡の分布に目を転じたい。八ヶ岳山麓は発掘調査事例が蓄積され、遺跡の継続性、規模を加味した遺跡分布論により集落遺跡の動向を概観することができる。

勅使河原彰(1992)は八ヶ岳西南麓の遺跡分布を分析し、火山性山麓が中小河川により浸食されて形成された長峰とよばれる細長い尾根筋単位に遺跡が通時的に展開し、拠点的な集落遺跡が同一尾根筋上に並存する場合は2km程度の間隔をおいて立地することを示したうえで、尾根筋あるいは2km間隔程度の空間が、日常的に占有する、植物質食料の独占的利用を保障した「生活領域」であったと推論した(第9図)。

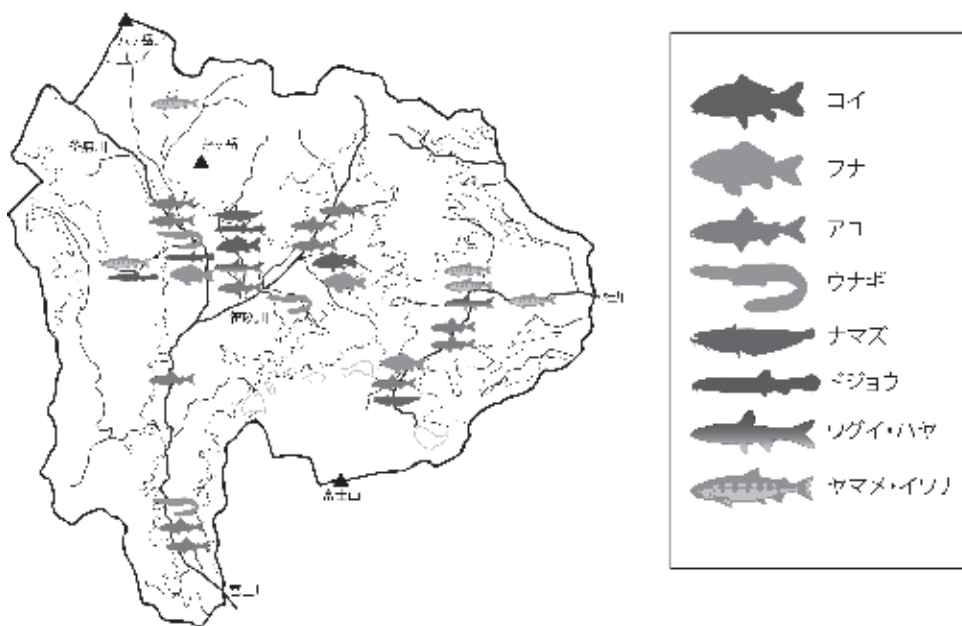
佐野隆(2013)は、八ヶ岳南麓では西南麓より多様な地形環境がみられるが、小河川流域(水系)ごとに遺跡群が想定され、遺跡群のなかで縄文時代中期を通じて集落が移動しながら展開した可能性を指摘した(第10図)。遺跡群の平均的な面積は3km²で、豊作時には一人当たり1ヘクタール程度の採集面積で足りると



第6図 島浜貝塚の生業スケジュール



第7図 淡水産資源量の地域比較



第8図 甲斐国の淡水魚利用の分布



第9図 ハヶ岳西南麓の遺跡分布と領域



第10図 ハヶ岳南麓の遺跡群

表2 中近世甲斐国の淡水魚利用の記録(山梨県立博物館2008を基に作表)

魚 種	記述名称	水 系	出典および記事、文献年代
?	小魚	笛吹川中流	二宮祭礼帳 天正年間
アユ	鮎	富士川中流	市川家光書状 1565
アユ	鮎	甲府盆地	元禄七年御公用留帳 甲府町方資料
アユ	鮎産上金	笛吹川中流	田中陣屋より鮎産上受取書 江戸時代後期? 山梨市
アユ	鮎産上	笛吹川中流	鮎産上請負の落札人と不正の鮎産取締り村頭状 1829 山梨市
アユ	鮎産上	釜無川	川産産上 1852 甲府市
アユ	鮎	釜無川	諸物通調 1873 甲府市
アユ	鮎産上	桂川中流	享保御成簡帳帳 1725 都留市
アユ	あゆ	桂川中流	鈴木屋吉平より酒肴代残金請求証文 1840 都留市
アユ	鮎	笛吹川中流	鮎産上請負人に付頭状 1712 塩山市
アユ	鮎	富士川中流	横根中村明細帳 1751 身延町
アユ	鮎	富士川中流	帯金村夫錢帳 1855 身延町
アユ	鮎鮎	桂川上流	太々神楽入用帳 1819 富士吉田市
アユ	鮎	釜無川 笛吹川中流	「...又川魚も鮎鮎は無之其外の川魚は色々有之、殊に塩引釜無川石和川の鮎産沢の鮎は甲州の名物也...」甲州 噺 1732
アユ	鮎	笛吹川・荒川 釜無川	笛吹・釜無・荒川の鮎...一川・芦川のヤマメ、ヤマコ、イハナ...鮎(どじょう)、鯉、鮒(なます) 裏見寒話 1754
イワナ	イハナ	一川・芦川	笛吹・釜無・荒川の鮎...一川・芦川のヤマメ、ヤマコ、イハナ...鮎(どじょう)、鯉、鮒(なます) 裏見寒話 1754
ウグイ	鯢	甲府盆地	甲府総町 西山梨郡、中戸座郡町誌稿 1879~1882
ウグイ	赤はら	桂川(笹子川)	「黒野田宿...平(豆腐、赤はら、干し物)、飯」 広重甲州道中記 1841
ウナギ	鰻鮓	笛吹川下流	大塚村沼請負証文 1787 中央市?
ウナギ	鰻	富士川中流	甲府総町 西山梨郡、中戸座郡町誌稿 1879~1882
ウナギ	鰻	釜無川	諸物品出産書 1875 甲府市
ウナギ	うなぎ	富士川中流	横根中村明細帳 1751 身延町
ウナギ	うなぎ	富士川中流	帯金村夫錢帳 1855 身延町
カジカ	鮓	釜無川	諸物品出産書 1875 甲府市
コイ	春鯉	甲府盆地	相川村農業生産調査 1923
コイ	冬鯉	笛吹川中流	大御巡見様御通行心得書・大御巡見様帳合書 1838 境川村
ドジョウ	どじょう	釜無川・塩川	明治二十四年家計日記 1891 甲府市
ドジョウ	鮎	一川・芦川	笛吹・釜無・荒川の鮎...一川・芦川のヤマメ、ヤマコ、イハナ...鮎(どじょう)、鯉、鮒(なます) 裏見寒話 1754
ドジョウ	鮎鮎	荒川	千塚村 鮎鮎ニヲドリコ 甲斐豆相採証記 1801
ナマズ	鮒	甲府盆地	甲府総町 西山梨郡、中戸座郡町誌稿 1879~1882
ナマズ	なまづ	桂川上流	太々神楽入用帳 1819 富士吉田市
ナマズ	ナマズ	一川・芦川	笛吹・釜無・荒川の鮎...一川・芦川のヤマメ、ヤマコ、イハナ...鮎(どじょう)、鯉、鮒(なます) 裏見寒話 1754
ハヤ	使魚獲	甲府盆地	甲府日記 1670
ハヤ	鮒	甲府盆地	甲府総町 西山梨郡、中戸座郡町誌稿 1879~1882
フナ	鮒	釜無川	「...又川魚も鮎鮎は無之其外の川魚は色々有之、殊に塩引釜無川石和川の鮎産沢の鮎は甲州の名物也...」甲州
フナ	鮒鮒	笛吹川中流	大塚村沼請負証文 1787
フナ	鮒	桂川上流	幕府巡見使、小沼村下組における休職入用帳 1838 西桂町
ヤマメ	ヤマメ	一川・芦川	笛吹・釜無・荒川の鮎...一川・芦川のヤマメ、ヤマコ、イハナ...鮎(どじょう)、鯉、鮒(なます) 裏見寒話 1754
ヤマメ	やまめ	桂川中流	「...塩池に向かう茶屋→やまめの使きびたし...」 広重甲州道中記 1841
ヤマメ	ヤマメ	桂川中流	「林鶴梁日記」(はやしかくりょうにつき) 弘化三年(1846) 上花咲宿
ヤマメ	ヤマメ	桂川中流	「林鶴梁日記」(はやしかくりょうにつき) 弘化四年(1847)
ヤマメ	やまめ	須玉川上流	下津金村御本館以来御代官様御留り・名主役引留帳

想定される堅果類を獲得する領域としては十分である(佐野・大網前掲)。

縄文時代の居住形態、居住地の移動の有無と程度が明らかとなっていない現時点で、遺跡数や住居跡数の増加現象の評価は困難とせざるをえない。しかし、八ヶ岳山麓の遺跡動態をみると、縄文時代前期から中期を通じて八ヶ岳山麓の開発と土地利用が進められ、遺跡数の増加と比例するかはともかくとして、地域人口が徐々に増加して、中期後半段階には日常的な植物質食料の獲得領域が明確化してくるプロセスが想定できよう。

このことは、高い遺跡密度のもと、集落周辺の限られた領域内で堅果類などを獲得していたことを示している。イノシシ、シカは格段に広い範囲で行われたであろうが、主食となる堅果類の採集、日常的な植物質資源の採集、補完食料の獲得は、この限られた領域内で完結していたからこそ、八ヶ岳山麓の高い遺跡分布密度が可能であったと循環論的だが評価できる。

内陸中部地方の生業構造とマメ類利用

八ヶ岳山麓に代表される内陸中部地方には温带落葉広葉樹林が広がり、シカ、イノシシが行われ、さらに限られた領域のなかで主食となる堅果類の採集が可能であったものの、補完食料には恵まれていない資源環境が想定された。

しかし、当該地方の河川上流域では、資源量からみて淡水魚に補完食料の役割を期待するのは困難である。大量捕獲・貯蔵の対象となる渡り鳥などの鳥類もいない。野生根茎類が利用できるが長期保存に不適である。根茎類はデンプン化して保存することができるが、デンプン化する労力は決して小さいものではなく、大量にデンプンを採取するとなると相応の設備も必要となる。こうしてみると内陸中部地方の生業構造は、適当な補完食料を欠く安定性の低い状況であったといわざるをえない。

生業安定性の低さを克服するために当時の人々が採用した生計戦略に、堅果類の増産が考えられる。各地の花粉分析結果から自然植生に対する人為的関与が認められ、オニグルミ、クリなど有用植物が管理栽培された可能性が指摘されている（辻 2006 など）。内陸中部地方では、花粉分析など実証的な成果に恵まれていないが、堅果樹種の生育を管理し補助する目的で自然植生の伐採、焼き払いなどの改変が行われた可能性がある。遺跡出土の炭化材にクリ、オニグルミが優越する状況は、こうした植生改変の間接的な状況証拠とみることができよう（佐野 2012）。

堅果樹種の増産を目的とした植生改変であるが、伐開された後の植生遷移において、ワラビ、ゼンマイ、ヒガンバナ、ウバユリ、クズ、ツルマメ、ヤブツルアズキなどのマメ類が副産物として成育し得たであろう（中山 2010）。一年生のマメ類は堅果類のような生産量の年変動が少なく、多量に採集でき、かつ貯蔵も可能である。生業上のリスクを回避するための自然林の改変と補完食料開発の要求が、内陸中部地方の野生マメ類利用を促進した可能性が考えられる。ここに至って内陸中部地方では、主食（堅果類）＋動物（シカ・イノシシ）＋補完（マメ類）という生業構造を想定することができ、同じような資源環境におかれたほかの地域でも同様の生業構造が発生しうると推測される。

堅果類とマメ類の接点としての「遷移畑」仮説

縄文時代の植物食研究を牽引した渡辺誠（1984）は、「植物食の重要性を強調している点において重要な仮説と考えられる縄文農耕論について、植物採集活動と統一的に理解する姿勢を確立することによって、問題の進展に何らかの寄与をなし得る」と述べ、植物資源の採集・加工活動の延長線上にある「半栽培段階」を重視した。福井勝義（1983）は、植生の遷移を利用して有用植物の生産性を高める生産様式として「遷移畑」の概念を想定し、いわゆる「雑穀を主とした焼畑」は遷移畑の進化形のひとつであるとした。中山誠二（2010）は、福井が想定した遷移畑的な生産様式のなかで野生マメ類が半栽培に近い形で利用され、やがてダイズやアズキの栽培種が発生した可能性を指摘した。

小論では、堅果類の生産性を高めるための環境改変のなかで、内陸中部地方の資源環境に起因する生業不安定性ゆえに、特に補完食料としてのマメ類利用が促進された可能性を指摘したい（第 11 図）。堅果類の生産性向上のための自然改変によって、図らずも野生マメ類利用に有利な環境が創出され、補完食料開発に寄与したというシナリオを中山に倣って「遷移畑」仮説と呼んでおこう。

しかし、遷移畑仮説は、マメ類圧痕資料が多く見出されるなどの内陸中部地方の考古学的な状況証拠と調和的であるものの実証されたわけではない。微粒炭（須賀ほか 2012）の体系的な調査や遺跡出土の炭化樹種の通時的変化の追究などによる環境改変の検証、野生マメ類の生産量や年変動、群落サイズなどの生態学的調査、打製石斧や大型粗製石匙等の石器研究など、実証に向けた課題は多い。

註 1 八ヶ岳山麓周辺ではマメ類圧痕の検出遺跡が多いだけでなく、一遺跡あたりの検出数も多い。山梨県韮崎市女夫石遺跡では 10 点以上のマメ類圧痕が検出されたが、甲府盆地東部の釈迦堂遺跡で確認された確実なマメ科圧痕は 1 点のみであった（中山・関間 2009、本書中山報告）。長野県岡谷市目切遺跡では 600 個体の土器にマメ類を含む 78 点の種実圧痕を見出し、1 個体に 6 点のマメ圧痕が認められる土器もあった（山田ほか 2012）。同じような状況は山梨県北杜市内の他遺跡でも確認されていて、目切遺跡が特殊例というわけではなさそうである。

註 2 東日本でもたとえば縄文時代前期の三内丸山遺跡のように恵まれた内湾環境のもとで堅果類と海産資源に大きく依存し、イノシシ、シカなどの陸生哺乳類の利用が控えめであった例もある（西本 1998、樋泉 2006）。このように列島各地の生業構造は、検討対象を増やすほど多様化すると思われるが、時間の制約から網羅的に検討することはできなかった。

参考文献

- 秋道智彌 1992 「水産資源のバイオマスとその変動」小山修三編『狩猟と漁撈』勇山閣
- 植月学 2010 「海生魚類」小杉康ほか編『縄文時代の考古学 4 人と動物の関わりあい 食料資源と生業圏』同成社
- 内山純蔵 2007 『縄文の動物考古学』昭和堂
- 沖野外輝夫 1997 「生物相の変遷」『アーバンクボタ 36 特集 諏訪湖』株式会社クボタ
- 小畑弘己 2011 『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社
- 小山修三 1988 「縄文文化の成熟と植物栽培の意味」佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生 縄文農耕論へのアプローチ』日本放送出版協会
- 佐藤宏之 2007 「縄文時代の狩猟・漁撈技術」小杉康ほか編『縄文時代の考古学 5 なりわり 食料生産の技術』同成社
- 佐野隆 2008 『梅之木遺跡Ⅶ』北杜市教育委員会
- 佐野隆 2012 「梅之木遺跡の炭化物分析」長野県考古学会 2012a
- 佐野隆 2013 「ハヶ岳南麓の河川と縄文時代中期の遺跡分布」『山梨県考古学協会誌』22号 山梨県考古学協会
- 佐野隆・大網信良 2012 「堅果類の生産量と縄文集落 ―茅ヶ岳西麓の分析から―」長野県考古学会 2012b
- 須賀文・岡本透・丑丸敦史 2012 『草地と日本人 日本列島草原 1 万年の旅』築地書房
- 辻 誠一郎 2006 「三内丸山遺跡の生態系史研究：成果と展望」『植生史研究』特別第2号 日本植生史学会
- 勅使河原彰 1992 「縄文時代の社会構成（上・下）」『考古学雑誌』第78巻第1号・第2号 日本考古学会
- 樋泉岳二 1991 「貝層の堆積季節を利用した生業季節スケジュールの復原方法とその意義―事例分析：伊川津貝塚における漁撈活動の季節性―」『国立歴史民俗博物館研究報告』29
- 樋泉岳二 1993 「伊川津貝塚における水産資源の空間的開発パターン」『21世紀への考古学』雄山閣
- 樋泉岳二 2006 「魚貝類遺体群からみた三内丸山遺跡における水産資源利用とその古生態学的特徴」『植生史研究』特別第2号 日本植生史学会
- 樋泉岳二ほか 2003 「第V章 羽根尾貝塚の動物遺体群」『羽根尾貝塚』玉川文化財研究所
- 中沢道彦 2012 「中部高地における縄文時代中期の植物質食料利用について 別冊資料第1表」長野県考古学会 2012b
- 長野県考古学会縄文中期部会 2012a 『長野県考古学会 50 周年記念プレシンポジウム 縄文時代中期の植物利用を巡る 予稿集』
- 長野県考古学会 2012b 『長野県考古学会誌 143・144 合併号 長野県考古学会設立 50 周年記念シンポジウム 縄文中期文化の繁栄を巡る』
- 中山誠二 2010 『植物考古学と日本の農耕の起源』同成社
- 中山誠二 2012 「山梨県における縄文時代の植物質食料の利用について」長野県考古学会縄文中期部会 2012a
- 中山誠二・関間俊明 2009 「山梨県女夫石遺跡の縄文時代中期のマメ圧痕」『山梨考古学論集Ⅵ』山梨県考古学協会
- 西田正規 1981 「縄文時代の人間―植物関係 食料生産の出現過程」『国立民族学博物館研究報告』第6巻2号 国立民族学博物館
- 西本豊弘 1998 「三内丸山遺跡第6鉄塔地区出土の鳥類・哺乳類遺体」『三内丸山遺跡Ⅸ』青森県教育委員会
- 福井勝義 1983 「焼畑農耕の普遍性と進化 ―民俗生態学的視点から―」大林太良編『日本民俗文化体系 5 山民と海人』小学館
- 藤森栄一 1995 「貝塚のない湖の回想」『かもしかみち』学生社
- 水沢教子 2012 「長野県における縄文時代の漁撈とサケ・マス論の展開」長野県考古学会誌 2012
- 南川雅男 1994 「アイソトープ分析よりみる食生態と環境適応」赤沢威編『先史モンゴロイドを巡る』日本学術振興会
- 保田謙太郎・山口裕文 2001 「アズキの半栽培段階における生活史特性の進化」山口裕文・島本義也編著『栽培植物の自然史』北海道大学出版会
- 山田武文・佐々木由香・興石甫・会田進 2012 「岡谷市内縄文時代遺跡出土マメ科種実とレプリカ法によるマメ圧痕調査」長野県考古学会 2012a
- 山梨県立博物館 2008 『甲州食べもの紀行 ―山国の豊かな食文化―』
- 吉川昌伸・鈴木茂・辻誠一郎・後藤香奈子・村田泰輔 2006 「三内丸山遺跡の植生史と人の活動」『植生史研究』特別第2号 日本植生史学会
- 渡辺誠 1984 『増補 縄文時代の植物食 考古学選書 13』雄山閣出版